

## 隣人を愛する者となる

ピリピ 2:16-18

先週に続いて今日のピリピ人への手紙も獄中書簡と呼ばれ、キリストのゆえに牢獄に入れられ、普通なら決して平然とはしてはられない中であってパウロは諸教会を、そしてそこに集う人たちを励まし慰めるような言葉を送っています。どうしてそのようなことが出来たのでしょうか？ この手紙は別名「喜びの手紙」とも言われています。それは「喜び」または「喜ぶ」ということばが繰り返して出てくるからです。そうです、彼の心の中には深く静かな、消えることのない喜びがありました。ですから逆境の中であつても人を励ますことが出来たのです。彼の内側から隣人を愛する愛がほとぼしるように流れていたのです。彼の心の中に喜びの源があったのです。そして自分の置かれている逆境や試練は彼の喜びを奪うことは出来なかったのです。私たちは、そのような喜びを持っているのでしょうか。自分の心の中に喜びが無ければ隣人を愛することは非常に難しいことになると言えます。もし、私たちの喜びが環境や状況、あるいは人の言葉や態度に頼って成り立っているとしたら、私たちは、毎日毎日怒ったり、泣いたり、喜んだりしなければなりません。しかしそれでは不安定な日々を送ることになります。だからと言って、何も表すことが出来ないと、いつのまにか「喜怒哀楽」を失い、何をしても喜びを感じることをできないいわゆる鬱の状態に陥ってしまうことがあります。

では、どうしたら、隣人を愛するために毎日心の中に、喜びを持つことができるのでしょうか。三つの喜びを持つための秘訣を考えたいと思います。

その第一は、自分の価値を知ることです。心理学者たちは、喜びを失った人々を観察し、調査して、その多くは、自分の価値を認められない人たちだと言っています。自分はそれなりに世の中であつて価値があるという思いは自己肯定感とも言われます。知的にも、身体的にも、環境的にもずいぶん恵まれているのに、いつも人とくらべて「自分は劣っている」とか「自分は優れている」とか考えている人は、喜びを持つことは難しいと思います。神はあなたに「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ 43:4) と語りかけておられます。どの人も神の目には価値のある尊い存在です。「自分には価値がある。」このことが分かれば、たとえ周りの状況がどうであっても、誰がどう評価しようと、私たちは神が私をこんなにも素晴らしく造ってくださったということに感謝し、それを喜ぶことができるのです。

「私たちには価値がある」と言いますが、その価値とはいったいどんなものなのでしょうか。聖書に人は土のチリから造られ、死んでまたチリに帰るとありますが、物質の面から言うなら、人間の体はほとんど値打ちの無いものです。しかし、神は私たちに霊を、魂を吹き込んで、人間を考えることが出来るもの、感じることができるもの、進歩や向上を目指して努力することが出来るもの、神を信じ、互いに信じあい、神を愛し、互いに愛し合い、神に仕え、互いに仕えあうことのできるものにしてくださいました。人間は動物とは違って、魂を持つものとして、神のかたちに造られたのです。ですから、人間の魂の価値は、イエス・キリストの言葉によれば、「全地球よりも重い」のです。

さらに言うなら私たちは、神の御子の命と同じほどの価値があるのです。みなさんが当然知っておられるように、神の御子イエス・キリストが十字架の上で死んでくださったのは、神から離れて罪の中に沈んでた私たちを、その罪からきよめて、神のものとして取り戻すためでした。キリストが、私のために命を投げ出してくださったということは、言いかえれば、私は、神の目には、キリストの命と引き換えにしても良いというほどの価値があるということなのです。そして、私にそれだけの価値があるのなら、あなたの隣に座っているあなたの兄弟姉妹も同じように貴い存在なのです。あなたには受け入れがたい人であったとしても神の目にはあなたと同じぐらい貴い存在なのです。ですからあなたは神の御子があなたのために、命さえも投げ出してくださった深い愛で愛されているのです。このイエス・キリストの愛を受け入れる時、私たちの心の中に、どんな時も変わらない喜びが湧きあがるようになるのです。湧きあがらな

いのはイエス・キリストの愛を受け入れていないからかも知れません。

次に、自分の人生の目的をはっきりと知っている人は、そのことによって喜びを持つことができます。人が見ればうらやむような良い仕事を持っているのに、その仕事が楽しくなくて、いつも不満ばかり言っている人がいたとしたら、その人は、おそらく、自分が何のためにその仕事をしているのか、自分の仕事の目的をつかんでいないからでしょう。最近、企業社会でもパーパス経営ということばを耳にします。利益をあげる、税金を納める、従業員を養うために会社が存在する。それはもちろんそうなのですがその先に一体会社は何のために存在するのかが問われています。その先はどうなってゆくのか？何のためにこのことをしているのか分からないほど苦しいことはありません。昔、囚人たちにさまざまな残酷な刑が課せられたものですが、その中のひとつに、「砂運び」というのがありました。大きな砂の山をこちらからあちらへと移すのです。昔のことですから竹のざるか何かで砂をすくって少しづつ運んだのでしょね。やれやれ終わったかと思うと、今度はもとのところに運びなおせというのです。そして、それがおわるとまたあちらへ。砂運びそのものは、さして厳しい労働ではないのですが、何の目的もなく、砂を運ぶだけという無意味なことの繰り返しのために、囚人はまいってしまったそうです。人間は目的のないこと、意味のないことの繰り返しには耐えられないのです。

スポーツ選手が、苦しい練習を耐えることができるのは、競技に出て賞を得るのだというはっきりとした目的を持っているからです。ゴールが明確だからです。しかし、私たちの人生にはかならずしも、目的や目標の見えてこないものも多くあります。毎日子供の世話で追われ、忙しくしている主婦にとって、自分の人生の目的はこれなのだと思信するのは難しい場合があります。それで、いろいろな習い事をしたり、趣味を楽しんだりするのですが、それによっても、確信を得られないのです。人生の目的というのは、何かをマスターしたり、資格を得たりする以上のものだからです。

深い意味での人生の目的は、私たちが造ってくださった神のもとに来るまでは分かりません。アウグスティヌスは「私たちのころには、造り主である神でしか埋め合わせることおできない空白がある」と言いましたが、その通りです。私たちの心にあるさまざまな空洞は、ある場合はお金によって満たされ、ある場合は友情によって満たされるでしょうが、私たちの魂の中心にある空洞は、物質によっても、人間的な成功によって満たされないのです。神によってしか満たされないのです。

イエス・キリストは言われました。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」(ヨハネ 10:10) 聖書が言う「永遠の命」とは、天国で永遠に過ごすことができるというだけでなく、この地上の人生を目的をもって、そして喜びをもって送ることができるということでもあるのです。イエス・キリストによって魂の中心を、永遠の命で満たしていただく、そうしてはじめて、私たちは本当に満ち足りた喜びの生活を送ることができるのです。その時はじめて、人生の意義と目的を見つけ出すことができるのです。

第三に、人生の喜びは、誰かに愛され、誰かを愛することの中にあります。愛のない人には喜びはありません。私は結婚式の前には、これから結婚するふたりと何回か結婚カウンセリングの時を持ちます。他のカウンセリングと比べて結婚カウンセリングはある意味やりやすいものです。もうすぐ結婚という二人には何を言ってもニコニコして聞いてくれます。どんなことでも前向きにとらえ、出来る限り自分たちに都合の良いように理解してくれますので進めやすいのです。同じように誰かに愛されているということを感じている人はどんな人にもやさしくなれ、会う人誰にでも親切にしたいくなるものです。

多くの人は、自分が愛されていないと感じるので、人を愛せない、人を愛せないから人からも愛されないという悪循環の中にいます。この悪循環を断ち切るために、「私は愛されている」ということを、いつも神様にあって自分に語り続ける必要があります。たとえ過去に親から捨てられ、友だちに裏切られるという経験があったとしても、全世界のすべての人があなたを無視し、あなたのことを嫌っているわけでは

ありません。どこかに、かならず、真心からあなたを愛し、あなたの友となってくれる人がいるのです。たと世界すべての人があなたに敵対しても、神様はあなたの父となり、イエスはあなたの友となってくれるのです。「わたしはあなたがたを友と呼びました」(ヨハネ 15:15)と言われます。

この神の愛を知るとき、私たちは、自然と自分のうちから愛が流れ出るのを体験します。神から受ける愛は分け与えて減るものではありません。携帯のバッテリーの減りを気にしながら電話を使うのとはまったく違います。むしろ、分け与えて何倍にも増えていくものです。誰も声をかけてくれない、誰も私の話を聞いてくれない、誰も分かってくれないとつぶやいていても解決にはなりません。誰かの愛の無さを責め立てても、批判しても自分の愛され感が増すわけではありません。むしろますます自分が惨めになるでしょう。自分から誰かに声をかけ、人の話を聞き、相手の気持ちを分かちあげましょう。あなたの方から犠牲をまず払うのです。そのことによってあなたも人に話を聞いてもらい、気持ちをわかちあえる、まわりの人から愛されているということを確認することができるのです。愛を受けたいと思うなら、まず愛を与えましょう。何度与えても応答が無いなら見切りをつけても仕方ありません。

今朝の聖書の箇所、ペリピ 2:16-18 で、パウロは自分の生涯をふりかえって「私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。」(16節)と言っています。パウロは自分が神の目に価値あることを知っていました。自分の生涯がキリストを宣べ伝えるためにあるのだということも知っていました。囚人となって伝道する自由を奪われても、それが彼に与えられた人生の目的を妨げるものでないことを知っていました。神のご計画はかならず実現すると信じていました。そして、パウロは「たと私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます。」(17節)と言いきることができるほど人々を愛しました。もちろんこれは自分自身が殉教することを覚悟しているわけですが。彼の喜びは、このような信仰から、愛から出てきたのです。パウロは私たちに勧めています。「あなたがたも同じように喜んでください。私といっしょに喜んでください。」(18節)信仰から来る喜びに、神を愛し、他を愛することから来る喜びにおひとりひとりが満たされますよう心から祈ります。